



Title	2019年度哲学対話ワークショップ報告
Author(s)	桂ノ口, 結衣; 小泉, 朝未; 小西, 真理子 他
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 74-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集3 哲学プラクティスについての講演&ワークショップ——ベルギー、スイスでの活動から

2019 年度哲学対話ワークショップ報告

取りまとめ：桂ノ口結衣

2019 年 3 月、ベルギー・スイスで哲学対話を実践している二人の哲学プラクティショナーを招いて講演・ワークショップを開催した。1990 年あたりから始まった、いわゆる「哲学プラクティス」と呼ばれる社会活動は、今日幅広い展開を見せている。臨床哲学研究室も、こうした活動の一翼として、2000 年頃から日本で試みを重ねてきた。今回は、最近のヨーロッパでの展開を知る機会として、それぞれのプラクティショナーの活動紹介と、実際の哲学対話をワークショップの形で行なってもらった。

以下では、この講演・ワークショップの様態を簡単に紹介するとともに、参加者からの感想などを掲載する。(堀江剛)

哲学プラクティスについての講演・ワークショップ：ベルギー・スイスでの活動から

日時：2019 年 3 月 19 日（火）10:00-18:00

場所：大阪大学豊中キャンパス（サイエンスラボ B）

主催：大阪大学文学研究科臨床哲学研究室

共催：一般社団法人 哲学相談おんころ*

■ 10:00-10:30 臨床哲学研究室とカフェフィロの紹介（堀江）

1990 年中頃に提唱された「臨床哲学」のコンセプトと、そのメンバーによって設立された「カフェフィロ」の活動を簡単に紹介。大学での「哲学研究」と、様々な人々と共に（対話を通して）社会で「哲学する」こととの接続の難しさにも触れる。

■ 10:30-11:20 ドゥニ・ピエレ（Denis Pieret）さんの自己紹介

ベルギー・リエージュ大学講師であり、かつ哲学プラクティス NPO “PhiloCité” のコーディネーター。大学では「哲学の歴史」しか語られず、社会で「哲学する」ことに挑戦したこと、学部長と交渉して NPO 活動の場所を大学内に設けた（収益の何%かは大学に収める）話も。

■ 11:20-12:00 ナタリー・フリーデン (Nathalie Frieden) さんの自己紹介

スイス・フリーブル大学元教授。高校の哲学担当教師であったが、そうした教師たちに哲学の授業方法に関するスーパーバイザーを引き受けたことから、哲学対話にコミットするようになったという。哲学的な知識ではなく、自分たちで人生や社会の問題を考える対話の姿勢を強調。

■ 13:30-15:30 ワークショップ 1 (進行役 : Denis Pieret)

自分の(医療関係者を集めた)哲学対話の模様を紹介することから始め、参加者から(主に哲学対話の進行に関連した)具体的な問題・課題を出してもらう。それを一つに絞って、他の参加者との対話を展開。

■ 16:00-18:00 ワークショップ 2 (進行役 : Nathalie Frieden)

プラトン『国家』に出てくる「ギュゲスの指輪」(羊飼が自在に姿を消すことのできる指輪を手に入れ王になった話)を紹介。人に知られなければ不正を行ってしまうことに対して、参加者の出す問いや考えを引き出す対話を展開。

※ 一般社団法人 哲学相談おんころ : 中岡成文(元臨床哲学研究室教授)氏が代表を務める。がんや神経難病の患者・家族を交えた哲学対話の場を提供する。

(堀江剛)

ドゥニさんの哲学対話

ドゥニさんの哲学対話では、心理学のカンファレンス形式を真似た、ケーススタディを哲学で行った。ファシリテーターの意図しているプロセスから外れた回答が出てきたら、それは意図とは違うと指摘し、ブレないことが印象的だった。下記に哲学対話の記録を残す。

1. 具体的に「困難なシチュエーション」について、ひとりが例を提示する。

「哲学対話をしたときに、ある女性が子どもを叩いてしまうということを言っていた。気になったがその話を対話の中で聞くことができなかった。」

2. 発言者以外の人にパラフレーズ(言い換え)してもらい、シチュエーションの理解を全員したか確認する。

3. なぜ困難なのかをみんなで考えるために、シチュエーションから一般化した問いを作る。

「なぜドメスティック・ヴァイオレンスについて話すのは困難なのか」

4. 一般化した問いが明瞭なものか全員で確認する。

「ドメスティック・ヴァイオレンスは限定しすぎだから、暴力と言い換えたほうがいいのではないか」

「誰に対して話すのかがわからない」

「～について話すというのが漠然としている」

5. もう一度、一般化した問いを練り直す。

「なぜ暴力について、暴力を行っているかもしれない本人を前にして話すのは困難なのか」

6. 一般化された問いの答えとなる例・理由を考える

「暴力としつけの違いなど定義が曖昧だから」

「親子の関係に他人が入るのは難しいから」

7. 1. で出された「困難なシュチュエーション」に自分自身がいたらどう切り抜けるか答える。その切り抜け方が 6. で考えた困難な理由を乗り越えられているかを吟味する。

「私なら、暴力についてその後の対話で話をするように持っていく。そのときには質問を次のように変える、なぜ私たちは子どもを愛していることがあるのに、時に理解できなかったり、腹が立って手を上げてしまったりするのだろうか」

※この時に「～すべきだ」というふうな道徳的提案や指示にならないようにファシリテーターはあらかじめ注意を促す。

8. いくつか回答を出した後に、1. で困難なシュチュエーションを提供してくれた人に、役立ったか、次はどう振る舞いたいかを聞く。

(小泉朝未)

参加者の感想（五十音順）

- わたしはドゥニさんのセッションで、事例提供者となった。近年の臨床哲学の演習等では、個人で行う哲学対話などの活動について話したり一緒に考えたりする機会がない。そのような話をしたところ、じゃあ今やってみようよという流れで、ドゥニさんは事例検討のセッションをしてくださった。わたしはそれぞれの活動について一緒に考える場がほしいと願っていたはずだったのに、いざ場が目の前に現れると、とくに「失敗」と捉えている事柄を話してみるにはとてもおそろしく感じて、少しのあいだ声がうまく出なかった。

でも、ドゥニさんのセッションに参加して本当によかった。「失敗」と捉えていた事柄は、その善悪を判じられることなく、場にいたみなさんに一緒に考えてもらえた。そ

れはわたしが「失敗」と捉えていた事例の場面とも繋がっている。わたしは事例当時まさに善悪を判じる道しか視界になくなっており、判定するということの暴力性に怯み、それ以上聞くことも話すこともできなかったのではないかと気づいた。善悪については一旦保留し、話された内容に介入しはじめるより前に、何が起きているのか、それはどういうことでありえるか、それに対し人間は（動物は、生命体は、ある文化は...）どのように関わっていけるのかを一緒に考える回路が開かれることが、時にどんなに助けになることか、身をもって感じた。

この WS 以前に、わたしはフランスのオスカル・ブルニフィエさんのセミナーに参加していたのだが、ドゥニさんのセッションはオスカルさんのセミナーで感じたのと同様の、「分かった気がする」で止まらず何が分かったか確認し合うことから少しずつうまれる信頼の心地よさを感じた。ただ、時間の制約、またジェンダーの問題等も影響していると思われたが、一見直接質問には答えていないように見える誰かの答えを止める際には、敬意やユーモアを殊に明示的にするという姿勢が重要である気がした。

つぎに、ナタリーさんのセッションについて。わたしは、ドゥニさんについては何が起きていたか、上手でないなりに整理して書けるのだが、「どんな質問があったか」や「どんな流れだったか」を整理してナタリーさんのセッションを書くことは難しい。でも、まったく優劣ということではなくて、今でもどんなふうに聞いてもらったか、そのときの佇まいや雰囲気を出せるのはナタリーさんのセッションのほうである。お話を語ってくださる声にわくわくしたこと、「人間はそもそもよいものそれとも悪いものだと思う？」と尋ねられ、それは人生で初めて耳にした問いというわけではないのに、まるで初めて考えてみるみたいだったこと、対話なんて何回参加してもやっぱり少しどきどきしながら話したこと、自分ではすごく名案だ！という気がして言った内容（人間はもともと悪だが、不完全ゆえにしばしば悪であることに失敗する）も、ふうん、とほかと同じくらいの温かさで聞いてくれたから、そのあと自分の頭の中で続きを考えるのではなくすぐ次のひとの話も聞けたこと、など。「哲学プラクティス」がどうというよりも誠実で温かなひとつの関わりとして、報告というよりもそぼくに思い出に残るような、わたしにとってはそんな時間であった。

わたしは、この日参加できてよかったなと思う。哲学プラクティスとはなにか、というより、哲学プラクティショナーとはどのように関わっていくひとたちか、に関心があるのだと自覚したのは、このお二人に出会えた機会も大きかったように思う。

（桂ノ口結衣）

■ ドウニさんとのセッションは私の視野を広げるものだった。

まず「臨床哲学」が大学でどのように位置づけられ、社会で活かされているのかという質問がドウニさんからあがり、私はその場にいた数少ない臨床哲学の院生として恥ずかしい気持ちになった。哲学に新しい領域を開いて来ようとした先輩ほど哲学には熱量なく、ただ新しい芸術の分野について私の興味のあるコミュニケーションや人々の関係性について考えられる場所だろうという予想で研究室にやってきた。対話の活動もそれが哲学的かどうかよりも、実際に社会でマイノリティの語られ方を変えたいという気持ちで行っている。わざわざ遠い国から臨床哲学に期待を持ってやってきた人に申し訳ないと思いながら、現状を伝えた。

同じような院生の話を聞いて提案してもらったのが、困難な状況をケーススタディのようにして、哲学的にみんなで解決のために話をするというもの。似たようなことは経験していてもおかしくないのに、困難なことを丁寧に話すことができた稀有な時間になった。実際に困難なことを聞く時には、「～～すべきだ」とか「～～してみたら」という個人に向けた提案をしなければいけないという気持ちになる。困難な状況にいるのが、より身近な家族であったり、困難さの原因が私自身の悩んでいることや、道徳の基準に触れていたりすると、困難さについて聞くより、一緒にその泥沼にはまるような形になる。答えが出ないし、答えが出せないことへの息苦しさがつくる。

ドウニさんのセッションでは、提案や指示ではなく、何が問題なのか、一般化してその後具体例をもとに考え直すという流れが明確で、かつ流れから外れるとドウニさんから教えてもらえるので、それらが困難さについて話すことの安心さを担保していたようにも思う。

研究室で困難さを喋ると当事者同士なので、先ほど言ったような泥沼にはまりがちだ。ドウニさんに私の状況を話すのは恐縮したけれど、研究室や私の状況を整理するのに良い時間を提供してもらえた。きちんと応答してもらったことはこれから研究室で活かしたいと思う。

セッションを一回受けて、よかったことが大半を占めているが、一つ疑問として上がったのは、整理して話すということが人を追い込んだり、置いていたりすることの可能性だ。ドウニさんが発する「それは私のやりたいことの意図と違う」というときに、言葉を発していた人は「私はどうしてもそれを言いたかった」とか「論理的に繋がらないけど、私にとっては一緒に話したい」というときもあるのではないだろうか。そういう話はまた別の場で話すことができればいいのだろうか。私は自分の母親に「理路整然と話して」と言ったら、話を聞いてないとショックを受けられ、怒られたことがある。私は母とも困難なことを整理し、話をしたい。哲学で一般化することの効果とそ

れが削ぎ落とすものをもう少し考えていきたい。

(小泉朝未)

- 今回のワークショップの1週間前にはじめて哲学対話(ネオ・ソクラティックダイアログ: NSD)の実践を経験したばかりで、今回のワークショップは2回目の哲学対話への参加だった。私は(時間の関係上)ドゥニ・ピエレさんが進行役をつとめたワークショップ1のみに参加した。おそらく、哲学対話にゆかりのある他の参加者よりも、技術を技術として捉えるというよりも、自然なまなざしで参加していたのではないかと思う。

NSDはある程度の一般化が求められるため、エピソード提供者の話から始まる内容であったとしても、導き出されるものは、その経験から少し距離を取ったものとなる。参加者全員の同意がなければ先へすすめないというルールにも裏づけられるように、そこには全員を平等に尊重するという魅力があり、これはこれとして大変魅力的な方法に感じられた。

それに対して、今回の哲学対話は、エピソード・問題提供者の悩みから出発して、その問題をみんなで共有する形のものであったため、一般化された問いが発せられた場合にも、エピソード・問題提供者の経験がつねに特権的であったし、進行役もそれが維持されるように振る舞うという特徴をもっていた。できるだけ参加者全員が問いや発言の理解を共有できるように意識された進行も感銘を受けるものではあったが、哲学的な問いを全体で共有して個々人の意見が尊重されつつも、エピソード・問題提供者の問いに最後まで特権をもたす仕方での展開される哲学対話は、私個人の求めるあり方に合っていて、全体にわたって違和感が少なく、自然な気持ちでいることができた。私個人として関心の強い「暴力」の問題に対しては、その取扱いの困難さへ言及したい気持ちは発生していたが、異なる思考の発言がある程度あったことや、時間の関係、場の雰囲気から、その気持ちは抑制すべきであると感じた。哲学対話と哲学研究の違いにわづかばかり触れた気がする。

(特にルール設定が少ない) 哲学対話は、進行役の思想を著しく反映したものになるだろう。そこに現れてくるものは、人との接し方にも関係するものでもあるし、研究の方法とも違いがありつつも一部重なるものだと感じた。

(小西真理子)

■ ドゥニさんとの対話について

ドゥニさんとの対話は貴重な体験でした。事例選択から吟味までわずかな時間でしたが、今までにない集中で対話をして納得できるまで考えられました。

この対話で私が学んだことの一つは「短く明確に質問し応答することの大切さ」です。それまで私が経験してきた自由な発言を許容する対話と違い、ドゥニさんは「相手の話が理解できたか否か?」と「何を理解したか(しなかったか)?」に限定して発言するように指示していました。そこでは自由に考え自由に発言できない代わりに、考えるべきことと話すべきことを明確にし、より正確に話を理解することが重んじられていたので、少なくとも私にとっては話がしやすかったです。

もう一つは、安心するよりも信頼して話すことの大切さです。私は、その場に出された問いに対して「答えがわからない」「問いが難しい」「答えたくない」というのを表明せず、ただ沈黙していることに対して「そのままで大丈夫」というのは安心ではなく、不安を放置することだと考えています。「わかる」「わからない」の二択をかけることに対して「きつい」「怖い」といった感想も聞きましたが、私は、きつい質問に対して誠実に答えることが相手に対して信頼を示すことであり、安心は信頼の結果生まれるものであり、初めから与えられるものではない、ということ学びました。

(富田真史)

- まず、海外のプラクティショナー（対話進行役）を招いて英語による対話ワークショップが実現したことの意味は小さくない。彼らの基本言語がフランス語であったことは別として、英語による進行に、10人以上の所属、バックグラウンドの異なる日本側参加者が応じることができた。日本語以外による対話の場を開くことは、今後とも追求したい。

対話の進行については、私が（臨床哲学が?）これまで承知していたのとは違う方法論が示された。ピエレさん、フリーデンさんの両方とも、アーヘンバッハという哲学プラクティスの創始者については名前も知らなかった反面、フランスのトジ(M・Tozzi)の「リフレーズ」の対話方法論には、影響を受けていた。つまり、もとになる発言を他の参加者が「言い直す」（解釈や批判は避ける）ことにより、対話が深まり展開していく。大阪に先立ってご両人が招かれた富山大学の国際シンポジウム・ワークショップでは、「おしゃべり棒」の方法も採用されていた。これは対話の冒頭、参加者がテーマについて思うことを順番に語っていくもの（10分間をあてる）。

もちろん、方法論以外のところで、対話進行役の個性、持ち味が演ずる役割は大きい。

ピエレさんは複数の方法を使い分けることを明言していた。彼の NPO が取り組んでいる社会的領域（福祉、医療など）の幅も大きい。彼らが現場の人々（たとえば緩和ケアに携わる医師）とどのような対話を展開しているのかを、具体的に聴く機会があればよかったと思う。参加者の言いよどみ、語れなさを尊重し、時間をとるフリーデンさんの姿勢も、見ていて感銘を受けた。富山の講演で、「オラリティ orality」（文字以前の表現や思考）に着目しつつ、子どものための哲学や教授法に取り組むと述べていたが、おそらくこの概念に関係するのだと思う。

大阪大学の臨床哲学が中心になり、多様な参加者を集めた今回の対話ワークショップ、たいへんよかった。それぞれの関心と現場をもつ対話グループがふだんはそれぞれの機動性を生かして活動しつつ、時にはこのように集まって対話の原点を確認したり、それぞれの事情を述べて意見交換し、刺激し合う、横断的な場が必要だと思う。大学組織としての臨床哲学に頼れる面と、在野の団体だからこそできる面とをうまく補完させ、新しい活動の開拓や資金獲得で協力していきたい。

（中岡成文）

- ドゥニ・ピエレさんが進行役となった哲学対話が、参加者による哲学的「思考」を実現するための手法として、とても興味深かった。参加者から「問題」を聞き、それを他の参加者に「リフレイン」してもらい、問題を出した当の参加者に確認してもらう。進行役が、それを一般的な「問い」の形にする。もしくはそうした「問い」に対して、別の問い方がないかを参加者のみんなに聞く。こうして「問い」に対する考えを自由に展開させる。最後は、問題を出した参加者に「何か得るものがあったかどうか」を聞いて終わる。これだけのことなのだが、言葉遣いをクリアにするというだけの作業によって、人々の考え方の多様性を浮き立たせていくことができる。その多様性に気づいて、参加者は自分で「哲学する」ことに誘われる。

もしかすると、これは（進行役も含めて）外国語で行われたゆえの効果であったのかもしれない、とも感じた。外国語であれば、拙い表現で懸命かつ簡潔に自分の考えを表明しなければならず、複雑な言い回しやニュアンスに立ち止まっている時間も能力もあまりない。それゆえにクリアに思考できたと感じる。母語であれば、余計な知識や自分のこだわりが思考の邪魔をする。母語話者同士で哲学対話を行うとき、この「邪魔もの」をどのようにして遮断するか(どのようにして抑制するか)が課題になるように思った。

（堀江剛）

- ワークショップの内容は他の方が書いてくれると思うので、「PhiloCité」について書きたい。活動領域・内容に関してはカフェフィロと必ずしも重ならないと感じたが、大学の外で活動する団体のあり方として「PhiloCité」の取り組みは興味深かった。特に「PhiloCité」は大学や専門機関に向けて自らの活動を積極的に提案し、活動場所などのサポートを（交渉の上）得ているという話だった。このような「攻めの」連携の仕方はカフェフィロやその他の哲学プラクティスを展開する個人・団体にとっても（真似るかは別として）参考になるのではと感じた。

（山本和則）